佐伯地方の姓氏（十一）

――「藤」の字のつく苗字（その三）――

佐脇貫一
（会員・佐伯市長良）

◇ 近藤氏には異流名家が多い

加藤氏が加賀介景道を始祖とするように、近藤氏は近江掾（じょうなが）脩行を始祖にしている。この近藤氏は北家流藤原秀郷（田原藤太）の後で、左衛門尉文行（佐藤氏祖）の子脩行が近江掾になり、近藤太あるいは近藤大夫と号したため、子孫が近藤氏を称した。

脩行の孫景親は嶋田権守と号したが、その子等はいずれも北面の武者として出仕したので、近藤武者所とよばれた。景親の長男は八郎大夫景重、その子が近藤八国澄。次男近藤武者景頼の子は近藤太能成、中原親能の猶子として豊後守護職をついだ大友左近将監能直の実父である。

この能成の子であるから能直にとっては弟にあたる近藤武者直景の後は三河に移り代々近藤氏を称し、寛政系譜によると末流二十七家があるという。江戸幕府初期の旗本近藤登之助季用はその一人である。武家近藤氏の家紋は「鹿角の丸」「唐人笠」「下り藤丸」等を用いている。

ところが近藤氏には秀郷流以外に堤中納言の雅名で知られた参議・中納言兼輔の長男刑部大夫雅正（ただ）と三男修理亮守正の後という二家がある。ともに中級公家であるが、数代後に国司・受領となった人々があり、院の北面に伺候して武家となり近藤氏を称した。

尊卑文脈によると、雅正の子は歌人で摂津・丹波守に任ぜられた為頼、その子は信濃守伊祐、以後越前守頼祐、中務大輔有信と続いているが、この有信は受領として近江守に補せられたことがあり、近江前司有信といい俗に近藤と号した。しかし、四伝して大膳大夫親輔にいたる

まで、みな従四位下に叙せられた中級公家である。

親輔の二子左馬助遠兼、右馬助資長はともに鳥羽院北面となり、それぞれ近藤氏を称したが、遠兼の孫宗重は後白河院北面となり、後伊豫守と称して後鳥羽院北面の所司（長官）をつとめている。

また修理亮守正の孫皇后宮大進資国は斉院次官平以康（桓武平氏高棟王の後播磨守平生昌の子）の子国仲を養って子にした。国仲は従五位上筑前守となったが、その二男盛重は周防国で生れている。おそらく母の関係と思うが、幼名を千寿丸といい、まだ少年のころ上洛、父とともに北面に参候したが、その折白河院のお目にとまり寵童となった。元服して近藤右衛門尉盛重と称し、近習になり、信濃、相模、石見、肥後の各受領を歴任した。盛重の後は次男筑後守・大宰少貳盛通が継いだ。盛重は肥後守として赴任したことがあると思われ、七男左衛門尉盛綱は通称を肥後十郎といい、上洛して滝口に仕えたが早世、猶子盛景が肥後十郎の名跡を継いだ。盛景の子は出雲守能盛、後白河院の北面となったが、院の勅宣によって随身（ずいしん）（近衛府の舎人、貴人の外出の時、弓矢を持って警固にあたる武士）磯部公春の子信盛を後嗣にした。

この信盛は石見守になり、後白河院の無双の寵遇をうけたといわれるが、事に坐して鎮西に下向した。信盛の子は信久、その子信茂の孫信貞は左衛門尉と号し、周防・能登の受領だったが、藤原姓を改めて本姓磯部姓に帰った。しかし、子孫は下北面または滝口に仕え近藤氏を称した。

前述したように秀郷流近藤氏は佐藤氏から分かれているが、これを二重写しにしたような別系統に利仁流斉藤氏族のものがある。それは坂戸判官後藤則明の子等で、肥前墓崎（つかさき）の後藤介政明と信濃墓崎の後藤三惟峯のうち、惟峯の子に嶋田権守惟重があり、惟重に行永・助永・貞成・景重の四子があるが、問題は三男近藤武者貞成である。この貞成は嶋田権守惟重の子だが、一方秀郷流では名は景頼、嶋田権守景親の子である。つまり貞成と景頼は同一人物となるわけで、ともに近藤武者と号し、相模国人である近藤太能成の父になっている。

このほか甲斐近藤氏は清和源氏武田氏族で、信濃国佐久郡に住んだ落合信実が外家の姓を冒かしたもの。信濃近藤氏は清和源氏村上氏族、信濃国更科郡清野に住み、清野氏を称したが後近藤氏に改めた。また豊後近藤氏は

三輪氏族というから大神姓であろう。緒方伊綱（これ）（惟綱）の子教心が近藤と号したという。

それでは佐伯地方の近藤氏は一体どのような系統に属するのだろうか。佐伯市内には約五十戸ほどの近藤姓があり、郡部には弥生町、宇目町、蒲江町、鶴見町に十戸ないし七、八戸の同姓がある。そして一般的に藤原氏裔説をもっているが、近藤氏は決して藤原氏族ばかりではなく異流が多いことも事実である。北面の武士として、鎌倉幕府の侍所（武者所）所属の武者として、近藤氏が著名だったので、この姓氏が旧族を仮冒する士民によろこばれたのである。佐伯地方の近藤氏を考えるとき、姓氏家系辞書（太田亮編著）にある豊後近藤氏の記述に注意したい。この近藤氏は三輪氏族（大神氏）緒方氏で、緒方伊綱の子教心に出ている。伊綱の「伊」は大神姓緒方氏の通字「惟」を誤伝したものといえるが、緒方氏は惟栄が宇佐宮焼亡の罪で遠流になったとき、子弟一族に連坐した者が多く、全国各地に離散した。九州では肥後がもっとも多く、肥前、豊前・筑前・筑後・日向の各地にあるが、私の調べたかぎりでは「惟」の通字を伝えるものが多いようだ。従って緒方伊綱は緒方惟綱と解してよいが、豊後近藤氏が緒方氏から出ているという傍証はない。しかし、大友興廃記・豊薩軍記・柵牟礼実録等の軍記類（稗史）にある佐伯氏に関する記述中に、近藤氏を名乗る家士があるから、緒方氏と佐伯氏の関係を考えると、まったく縁がないとはいえない。

岸河内へ向ひたる因尾の士には、柳井左馬助・杉谷兵部丞・同源四郎・柳井兵庫助・同雅楽助・同弥右衛門・三代勘解由・稗田右馬助・柏江新左衛門・近藤久右衛門等を先として、其勢二百余人、路の険難なるにより皆歩立に成りて押向ふ。日州勢は樺ケ畑の峠に陣営して居たりけるが、其日は朝霧深く降りおおひしに放火の烟立交り、十余間より外は物の黒白も見へ分ぬ程なりければ…（略）…さしも武勇の因尾勢、忽ちに追立られ鬼ケ原まで敗北す。されども杉谷兵部丞、近藤久右衛門、三代勘解由と云ける者三人踏（ふみ）止まり、兵部丞鉄炮を膝（ひざ）台にのせ、真先に進んだる兵を真倒に討伏る。

（豊薩軍記巻七より）

これは天正十四年（一五八六）十一月四日の堅田合戦を記述したもの（一部分）で、近藤氏がでているところである。また柵牟礼実録には佐伯惟教の家中に近藤八郎

という者がある。

◇　地方的で珍らしい権藤氏

近藤（こんどう）ともっとも読み方の近い苗字に、権藤（ごんどう）がある。

この権藤氏は代々大宰大監になったという筑前原田氏の一族で、本来は大蔵氏だが中世末藤原氏を称し、原田権頭と号したところから、権藤氏を称するようになったというが、また肥後国飽田郡権藤村（護藤村）に発祥した在庁官人で、発祥地によって権藤氏と名乗ったともいわれる。こうした伝承によって姓氏家系辞書には「権藤隼人藤原長常という者は、大友義長、義鑑、義鎮の三代に仕えて著名」と記載してあるが、大友三代の名臣に権藤氏があったかどうか。義鎮家中の御紋衆（大友一族）・国衆（緒方氏一族）・新参衆（お下り衆ともいう、最初からの家臣団または他地方から来って家臣となった者）三種の姓氏二百四十九のなかには権藤氏は入っていない。

しかし、大分市生れの著名人に、洋画家で県美協初代会長の権藤種男氏（故人）があるから、中世ないし近世の府内（大分市）には権藤姓があったものだろう。電話帳等で見ると佐伯市内に権藤姓はただ一家、南郡各町村や臼杵・津久見両市、大野郡等にはまったくない。そのことは権藤姓が数少ない、珍らしい苗字であることを示しており、佐伯市内にある同氏はおそらく市出身者ではないのであろう。

◇　遠藤氏は遠江（静岡県）に発祥した

遠藤氏は遠江守または遠江権守であった藤原氏が称した家号（苗字）である。そもそもの家筋は藤原南家、左大臣武智麻呂（むちまろ）の後で、前述した工藤氏と同祖、武智麻呂七代の孫常陸介維幾の子木工助為憲からでている。つまり工藤氏とは同祖同宗で、遠藤氏の成立は工藤氏の成立と重なっている。為憲は工藤大夫と号したが、従五位下遠江権守に任ぜられた。尊卑文脈によると、為憲の子は時輔と時理（まさ）で、この時理に時信・維景・維永・維重の四子がある。

一方、相良系図によると、為憲の子は為時と為保、そして為時の子が時頼と時任、次に時頼の子に時理（駿河守・工藤判官代）・時文・維雄（河内工藤祖）の三子がある。

そこで文脈の系図を追うと、時信の子が維清（入江馬允）・維遠（駿河守）で、この維遠の子に維兼（二階堂流の祖）と遠江権守維頼がある。維頼の子は内匠少允維弘、遠藤氏の祖といわれている。相良系図は駿河守時理の弟時文を中将（従四位下の官職である近衛中将）とし、その子維兼を遠江守、時金を遠江工藤の祖にしており、時金の頭書に「按ずるに時金はまさに金時に作るべし。遠藤系図が公時に作るは即ち之なり」と記してある。

さて遠藤系図によると、遠藤氏の始祖は承平・天慶の乱に征東・征西大将軍を拝命、平将門や藤原純友を追討した藤原忠文になっている。系図は忠文―公時―為方となるが、忠文の子には木工頭滋望という者はあっても、公時または金時（時金）に相当する者はない。そのため忠文は相良系図の時文のことではないかといわれ、公時は同系図の時金であろうという。公時の子為方は遠藤六郎大夫と号し、摂津守になっている。為方の子は頼恒、その子は長が為光、次が為助、三が貞方、いずれも摂津国渡辺（現大阪市内）に住んだ。為助の子が為長と為忠、この為長はまたの名を茂遠あるいは盛光とよばれ、遠藤武者盛遠の父である。（茂遠は渡辺の左近将監茂遠とよばれて、院の北面に伺候した。）

遠藤武者盛遠は北面の武士で上西門院（鳥羽天皇の皇女統子内親王）に仕えたが、十九才のとき渡辺の滝口の武者渡の妻袈裟御前に懸想し、誤ってこれを殺害した。おのれが業の深さに剃髪出家した盛遠は、法名を文覚と称し、紀州熊野をはじめ各地の深山幽谷に籠って難行苦行、やがて高雄山神護寺（京都市右京区）を中興し、高雄の文覚としてその名を知られた。性来の熱血漢で、平家の専横を悪み、伊豆に下って源頼朝の挙兵を促した。しかし、奇矯な行為が多かったため、朝廷に忌避され、正治元年（一一九九）には佐渡へ、さらに元久二年（一二〇五）には対馬へ流罪となった。（なお文覚上人の終焉地はわからない。）

このほか遠藤氏には桓武平氏千葉氏族というものがある。これは近江国三上一万二千石遠藤氏の家系で、千葉介常胤の子東（とうと読む）胤頼七代の孫東下野守常縁（室町時代の歌人、東野州という）の流である東元胤の子常慶が姻族遠藤胤好の子盛数を嗣とし、盛数は遠藤氏を称したのでこの一族を東家遠藤氏という。本領は美濃郡上（八幡町）郡郡上城主であったが、盛数の子左馬助

慶隆は天正十五年、秀吉のため郡上城を没収され美濃小原で七千五百石を与えられた。（小牧の役で織田信雄に欺を通じたため）しかし、慶長五年九月の関ケ原の役には東軍（徳川家康方）に応じ、郡上城を攻撃、稲葉右京亮貞通と戦った。（貞通は初め西軍だったが、決戦前に東軍に降り、戦後井伊直政のあっ旋で豊後臼杵五万石に封ぜられた。）同年遠藤慶隆は旧領郡上城に復し、加封されて二万七千石となった。なおこの遠藤氏は元禄五年（一六九二）四月、当主岩松常久が七才で殁し、改易の宿命となったが、先祖慶隆の勲功により戸田氏成（美濃大垣新田一万石）の養子数馬を迎え家督とし、名跡を継がせた。（常陸・下野のうちで一万石、遠藤但馬守胤親という。）家紋は桓武平氏千葉氏に縁のある「亀甲に花角」を正紋、「月星」「十曜」を副紋にする。

佐伯市には遠藤姓は少なく数家にすぎないが、どういうわけか臼杵市に五十余戸、津久見市には約四十戸あり、南郡内では鶴見町に三、四戸、蒲江町にただ一戸ある。

そして臼杵市における分布は藤河内・下ノ江が中心、津久見市では長目、上青江が中心になっている。

◇ 武藤氏は近藤氏から出た

武藤氏は秀郷流近江掾藤原脩行の末流で、近藤武者景頼の猶子頼平が武者所の所司になったので武藤と号したというが、武藤系図によると、関白藤原道長の子権大納言長家の子に長頼という者があり（長家は御子左流の祖、長頼に該当する子孫なし）武蔵国に下り武藤中帳と号した。その子が武藤検校（けんぎょう）（技）頼氏、頼氏の子頼家は新中納言平知盛の子を養い頼兼と名乗らせたという。

〔註〕検校とは僧尼を監督したり、社寺の事務を総管する職。また荘官の一種。

尊卑文脈の武藤氏系図は近藤武者景頼の子（あるいは猶子）頼平を祖としているが、頭註に「依為武者所号武藤」また「（藤）頼兼子也。武藤検仗（けんじょう）頼氏之後胤也。頼氏為（源）頼義朝臣副将軍、検仗也」とあり、頼平の実父は武藤頼兼ということになっている。

〔註〕検仗とは鎮守府将軍、大宰帥、按察使、陸奥・出羽国守など、辺境の官人につけられた護衛の武官。

さて頼平は武藤大蔵丞と号して、武蔵国戸塚郷（現横

浜市内）を本拠にした。頼平が武者所と記されているのは鎌倉幕府の侍所に所属したからである。

頼平には頼忠・資頼・頼高・氏平・宗平の五子があるが、長男頼忠は武藤太郎、次男資頼は武藤小次郎と号しいずれも源頼朝の従士として関東平定に功があった。とくに資頼は頼朝の側近に仕え、建久元年（一一九〇）十一月、頼朝が初めて上洛した時、先陣畠山重忠に続く先陣随兵の第四十番として所六郎、豊嶋八郎と並進した。大蔵丞頼平は鎌倉幕府の寺社方奉行をつとめ、建久五年十二月、中原親能、藤原行政（二階堂流、民部丞という）とともに永福寺（鎌倉・頼朝祈願所）阿弥陀堂の修造にあたった。

文治二年（一一八六）鎌倉幕府は九州の御家人統率と平家残党の掃蕩のため、天野遠景（藤内兵衛・民部丞）を九州総追捕使として下向させた。遠景は強引な武断政治を行ない、荘園領主の権益を遠慮会釈なく侵奪したので、九州各地の豪族から非難された。建久六年（一一九五）幕府は遠景を鎌倉によびかえし、そのあとに中原親能（掃部頭）と武藤資頼を起用、中原親能は鎮西奉行となり、豊後・筑後・肥後三国の守護に、武藤資頼（小次郎）は豊前・筑前・肥前の三国と壱岐・対馬二島の守護になった。ついで資頼は大宰少貳・筑前守に任ぜられて、大宰府官を統括し、九州全体の行政を監察する地位についた。

武藤資頼は幕府に重用されて大宰少貳となり、子豊前守資能も大宰少貳に任ぜられたので、以後武藤といわず少貳氏を家号とした。資頼の兄武藤太郎頼忠の子左衛門尉頼茂は武藤氏の嫡流として鎌倉にあり、評定衆となったというが、この頼茂は資頼の子ともいわれている。

少貳氏系図では資頼の子は資能と経重、経重は筑紫氏の祖である。資能の後は経資（法名浄恵）―盛経―貞経（法名妙恵）―頼尚と続き、九州武藤氏の宗家になった。武藤姓については武者所の藤原氏という説と、武蔵国に住んだ藤原氏という説の二者があるが、前者は少貳氏の家祖説、後者は武藤系図の家祖（権大納言長家）説である。しかし、武蔵国の藤原氏は幡羅（はら）・成田・別府氏などを出した武藤氏で、太政大臣藤原伊尹（これただ）の孫武蔵守基忠の裔、同国騎西郡司宣直の後であるともいう。（武蔵国に騎西郡はなく、これは埼玉郡騎西庄司であろう。）

もう一つの武藤氏は三河物語を書いた大久保彦左衛門

忠数ら大久保一族の祖先という武藤泰宗で、粟田関白道兼の裔宇都宮氏の族である。すなわち道兼の曽孫宇都宮座主宗円の子八田権守宗綱の後で、宇都宮下野守景綱の四男五郎左衛門尉泰宗、実名を盛宗といって本領を武蔵国内にもっていたらしい。そのためか子時綱は武藤左衛門尉と称し、また三河守とも称している。この時綱の子が左近将監泰藤で三河大久保氏の祖である。

佐伯地方の武藤氏は十数戸で、県南では大野郡に約三十戸ある。佐伯市内では中村地域を中心に散在しているが、旧城下内町の商家「塩屋」は武藤氏だった。往時佐伯地方では「むとう」と訓まず「ぶどう」と濁っていたが、武藤は姓氏の建前から「むとう」でなければならない。

（つづく）

表紙解説

田野磨崖仏

宇目町大字重岡字田野
田野区所有

田野磨崖仏は佐伯市南郡における唯一の磨崖仏である。凝灰崖の岸壁に、地上三㍍五〇㌢位の高さの所に半丸彫で、高さ八〇㌢位の大きさの阿弥陀如来が彫られている。

その左方に高さ五㍍五〇㌢、一字の大きさ五二㌢×五二㌢の「南無大師遍照金剛」の大文字が薬研彫りされている。

中央下に

明和七庚寅八月廿一鳥
長昌寺現住
大峻謹佛像名號彫
剋之行幸五十歳　（以下略）

とあり、これは供養のために造られたものであろう。

ここにはこの他、窟状に彫り込んだ石窟仏、卒塔婆形の金剛界万霊供養塔等々あり、石仏全体としては奈良時代からはじまっている。

（『ふるさとの文化財うめまち』より略記）